

〇-30) 転移性脳腫瘍に対するガンマナイフによる複数回治療  
—症例報告—

城倉 英史・高橋 康 (鈴木二郎記念  
診療所ガンマ  
ハウス)  
嘉山 孝正・吉本 高志 (東北大学脳研  
脳神経外科)

2例の多発性転移性脳腫瘍に対し新たな病変の出現とともにガンマナイフ治療を繰り返し、良好な QOL を維持することができたので報告する。

症例1; 45歳女性。33歳時に甲状腺癌の手術を行い、その7年後以降より9回にわたり脳、脊髄、頭蓋骨、肺の転移巣摘出術、2回の <sup>131</sup>I による内部照射が行われてきたが、さらに脳内に多数の脳内転移巣を認め当施設紹介となった。1993年3月12ヶ所の転移巣にガンマナイフ治療を行った。その後経過は良好であったが新たな転移巣が出現したため1994年2月16ヶ所の転移巣に治療を行った。患者は治療時の QOL を維持しており独歩が可能である。

症例2; 57歳男性。53歳時に腎癌により右腎臓摘出を行い経過良好であったが、1993年7月脳内転移により急速に右麻痺が出現、8月に3ヶ所の転移巣に対しガンマナイフ治療を行った。麻痺は3週間目に完全に消失、復職した。その後同年10月、12月及び本年3月と新たな転移巣の治療を行ったが、現在も神経症状なく何れも治療後数日後から仕事に戻っている。

〇-31) 聴神経腫瘍に対する GAMMA KNIFE SURGERY

福岡 誠二・瀬尾 善宣  
高梨 正美・大里 俊明  
尾崎 義丸・宇佐美 卓  
田中 靖通・末松 克美 (中村記念病院  
脳神経外科)  
中村 順一

目的: ガンマナイフにて治療し、6カ月以上 follow-up した聴神経腫瘍31例 (NF2 は2例) の施行後の累積縮小率、聴力、および合併症より、聴神経腫瘍に対するガンマナイフの有効性について検討した。

結果: 1年後にて、半数以上に縮小を認める様になり、累積縮小率は統計学上、2年後で92%となった。聴力は83%で術前のレベル (-10 dB まで) に温存され、特に serviceable の症例においては89%であった。NF2 の2例においては半年後に deaf となった。合併症については、軽度の facial palsy 1例 (現在ほぼ full に回復)、

水頭症1例を認めた。又、3.5 cm の腫瘍において expansion による ataxia にて1年後摘出術が施行された。

結論: ガンマナイフはごく低率の合併症と高い累積縮小率により、中等度までの大きさの聴神経腫瘍に有効と思われた。

〇-32) Chiari 奇形を合併した脊髄空洞症における髄液動態の病態生理  
—cine MRI による検討—

黒田 敏・松沢 等  
飛驒 一利・小柳 泉 (北海道大学  
脳神経外科)  
岩崎 喜信・阿部 弘 (札幌麻生脳神経  
外科病院)  
斎藤 久寿

Presaturation method を併用した cine MRI を用いて Chiari 奇形 (type. I) を合併した脊髄空洞症の髄液動態を検討したので報告する。【対象, 方法】Chiari 奇形 (type. I) を合併した脊髄空洞症21例を対象に、cine MRI を用いて頭蓋頸椎移行部および空洞内の cardiac-related CSF flow を定量的に解析した。手術 (大孔減圧術: FMD, 空洞一くも膜下腔短絡術; SS shunt) の前後に検討を加えた。【結果】頭蓋頸椎移行部では心収縮期に生じる CSF の caudal flow の最大速度およびその位相に明らかな異常が多くの症例に認められた (71.4%)。特に脊髄後方のくも膜下腔における位相の変化は、FMD の術後効果の判定に有用であった。また、空洞内容液は心拍に同期として CSF と同様に to-and-fro motion を繰り返していたが、その位相は必ずしも一定ではなかった。この motion が認められない症例も見られた (17.6%)。FMD によって空洞内容液の運動は消失する傾向がみられた。【結語】本法により、Chiari 奇形に起因する cardiac-related CSF flow を検出することが可能であった。特に FMD の術後の効果判定にも有用であった。空洞の形成、拡大のメカニズムについて考察する。

〇-33) 後頭蓋窩減圧と laminectomy, laminoplasty により著効を示した syringomyelia を伴った Chiari malformation (type 1) の3例

鈴木 豪・相馬 正男  
立木 光・小保内主税 (岩手医科大学  
脳神経外科)  
日高 徹雄・小川 彰

Chiari malformation (type 1) に伴う syringomyelia に対し、これまで種々の手術法が報告されているが、今